

校異源氏物語・藤はかま

内侍のかみの御宮つかへのことをたれもくそ、のかし給もいかならむおやと思ひきこゆる人の御心たにうちとくましき世なりければましてさやうのましらひにつけて心より外にひんなき事もあらは中宮も女御もかたくにつけて心をき給は、はしたなからむに我身はかくはかなきさまにていつ方にもふかく思とゝめられたてまつれるほともなくあさきおほえにてたゝならすおもひひいかて人わらへなるさまにみきゝなさむとうけひ給人ゝもおほくとかくにつけてやすからぬことのみありぬへきをものおほししるましきほとにしあらねはさま

くにおもほしみたれ人しれす物なけかしさりとてかゝる有さまもあしき事はなけれとこのおとゝの御心はへのむつかしく心つきなきもいかなるつゐてにかはもてはなれて人のをしはかるへかめるすちを心きよくもありはつへきまことのちゝおとゝも此殿のおほさむ所はゝかり給てうけはりてとりはなちけさやき給へきことにもあらねは猶とてもかくてもみくるしうかけくしきありさまにて心をなやまし人にもてさはかるへきみなめりと中くこのおや尋きこえ給て後はことにはゝかり給けしきもなきおとゝの君の御もてなしをとりくはへつゝ人しれすんなけかしかりけるおもふことをまほならずともかたはしにてもうちかすめつへきをなんおやおはせすいつ方もくいとつかしけにいとうるはしき御さまともにはなに事をかはさなむかくなんともきこえわき給はむよの人にぬ身の有さまをうちなかめつゝ夕くれの空のあはれけるけしきをはしちかうてみいたし給へるさまいとおかしうすきにひ色の御そなつかしきほとにやつれて例にかはりたるいろあひにしもかたちはいとはなやかにもてはやされておはするを御まへなる人ゝはうちゑみてみたてまつるに宰相の中將おなし色のいますこしこまやかなるなをしすかたにてえいまき給へるすかたしもまたいとなまめかしきよらにておはしたりはしめよりものまめやかに心よせきこえ給へはもてはなれてうとくしきさまにはもてなし給はさりしならひに今あらさりけりとてこよなくかはらむもうたてあれはなをみすにき丁そへたる御たいめむはひとつてならてありけりとゝ御せうそこにてうちよりおほせことあるさまやかてこの君のうけたまはり給へるなりけり御返おほとかなる物からいと

めやすくきこえなし給けはひのらうくしくなつかしきにつけてもかの野わきのあしたの御あさかほは心にかゝりてこひしきをうたてあるすちにおもひしきゝあきらめてのちはなをもあらぬ心ちそひてこの宮つかひをおほかたにしもおほしはなたしかしさはかりみところある御あはひとにておかしきさまなることのわつらはしきはたかならすいてきなんかしと思にたゝならすむねふたかる心ちすれとつれなくすくよかにて人にきかすましと侍つることをきこえさせんにかゝ侍へきとけしきたてはちかくさふらふ人もすこししりそきつゝ御き丁のうしろなどにそはみあへりそらせうそこをつきくしくとりつゝけてこまやかにきこえ給うへの御けしきのたゝならぬすちをさる御心し給へなとやうのすちなりいらへ給はんこともなくてたゝうちなけき給へるほとしのひやかにうつくしくいとなつかしきになをえしのふましく御ふくもこの月にはぬかせ給へきを日ついてなんよろしからさりける十三日にかはらへいてさせ給へきよしの給はせつなにかしも御ともにさふらふへくなん思給ふるときこえ給へはたくひ給はんもことくしくしきやうにや侍らんしのひやかにてこそよく侍らめとの給この御ふくなんとのかはしきさまを人にあまねくしらせしとおもむけ給へるけしきいとらうあり中将ももらさしとつゝませ給らむこそ心うけれ忍ひかたく思たまへらるゝかたみなれはぬきすて侍らむこともいと物うく侍ものをさてもあやしうもてはなれぬことのまた心えかたきにこそ侍れこの御あらはしころもの色なくはえこそ思給へわくましかりけれとの給へは何事もおもひわかぬ心にはましてともかくも思たまへたとられ侍らねとかゝるいろこそあやしくものあはれなるわさに侍けれとて例よりもしめりたる御けしきいとらうたけにおかしかるついてにとや思よりけむらにの花のいとおもしろきをもたまへりけるをみすのつまよりさし入てこれも御らんすへきゆへは有けりとてとみにもゆるさても給へれはうつたへに思よらてとり給御袖をひきうこかしたり

おなしのゝ露にやつるゝふちはかまあはれはかけよかことはかりもみちのはてなるとかやいと心つきなくうたてなりぬれとみしらぬさまにやをらひきいりて

たつぬるにはるけき野への露ならはうすむらさきやかことならましかやうにてきこゆるよりふかきゆへはいかゝとの給へはすこしうちわらひてあさきもふかきもおほしわくかたは侍なんと思給ふるまめやかにはいとかたしけなきすちを思しりなからえしつめ侍らぬ心中をいかてかしろしめさるへきなかくおほしうとまんかわひしさにいみしくこめ侍を今はたおなしと思給へわひてなむ

頭の中將のけしきは御らむしりきや人のうへになんとおもひ侍けん身にてこそいとおこましくかつは思給へしられけれ中／＼かの君は思さましてつゐに御あたりはなるましきたのみにおもひなくさめたるけしきなとみ侍もいとうらやましくねたきにあはれとたにおほしをけよなとこまかにきこえしらせ給ことおほかれとかたはらいたければかかぬなりかむのきみやう／＼ひきいりつゝむつかしとおほしたれは心うき御けしきかなあやまちすましき心のほとはをのつから御らむししらるゝやうも侍らむ物をとてかゝるついでに今すこしもらさまほしけれとあやしくなやましくなむとていりはて給ぬれはいといたくうちなきてたち給ぬなか／＼にもうちいてゝけるかなとくちおしきにつけてもかの今すこし身にしてみておほえし御けはひをかかりのものこしにてもほのかに御こゑをたにいかならむつゐてにかきかむとやすからす思つゝ御まへにまいり給へれはいて給て御返なときこえ給この宮つかへをしふけにこそ思給へれみやなどのれんし給へる人にていと心ふかきあはれをつくしいひなやまし給ふになん心やしみ給らんとおもふになん心くるしきされと大原野の行幸にうへをみたてまつり給てはいとめてたくおはしけりとおもひ給へりきわかき人はほのかにもみたてまつりてえしも宮つかへのすちもてはなれしと思ひてなんこのこともかくものせしなどの給へはさても人さまはいつ方につけてかはたらひてもものし給らむ中宮かくならひなきすちにておはしまし又こき殿やむことなくおほえことにてもものし給へはいみしき御思ひありとも立ならひ給ことかたくこそ侍らめ宮はいとねんころにおほしたなるをわさとさるすちの御宮つかへにもあらぬ物からひきたかへたらむさまに御心をき給はむもさる御なからひにてはいと／＼おし／＼くなんきゝ給ふるとおとな／＼しく申給かたしや我心ひとつなるひとのうへにもあらぬを大將さへ我をこそうらむなれすへてかゝることの心くるしさをみすくさてあやなき人のうらみをふかへりてはかる／＼しきわさなりけりかのほゝ君のあはれにいひをきしことのわすれさりしかは心ほそき山さどになときゝしをかのおとゝはたきゝいれ給へくもあらすとうれへしにいとおしくてかくわたしはしめたるなりこゝにかくものめかすとかのおとゝも人めかい給なめりとつき／＼しくの給なす人からは宮の御人にていとよかるへしいまめかしくいとなまめきたるさましてさすかにかしこくあやまちすましくなとしてあはひはめやすからむさてまた宮つかへにもいとよくたらひたらんかしかたちよくらう／＼しきものゝおほやけ事などにもおほめかしからすはか／＼しくてうへのつねにねかはせ給御心にはたかふましなどの給けしきのみまほしければとしころ

かくてはくゝみきこえ給ける御心さしをひかさまにこそ人は申なれかのおとゝ
もさやうになむおもふけて大将のあなたさまのたよりにけしきはみたりけるに
もいらへけるときこえ給へはうちわらひてかたゝゝいとにけなきことかな猶宮
つかへをも御心ゆるしてかくなんとおほされんさまにそしたかふへき女は三に
したかふものにこそあなれとついてをたかへてをのか心にまかせんことはある
ましきことなりとの給うちゝにもやむことなきこれかれ年ころをへてももし
給へはえそのすちの人かすにはものし給はてすてかてらにかくゆつりつけおほ
そふの宮つかへのすちにらうせんとおほしをきつるいとかしこくかとあること
なりとなんよろこひ申されけるとたしかに人のかたり申侍しなりといとうるは
しきさまにかたり申給へはけにさはおもひ給らむかしとおほすにいとおしくて
いとまかゝしきすちにも思より給けるかないたりふかき御心ならひならむか
し今をのつからいつ方につけてもあらはなる事ありなむ思ひくまなしやとわら
ひ給御けしきはけさやかなれと猶うたかひはをかるおとゝもさりやかく人のを
しはかるあんにおつることもあらましかはいとくちおしくねちけたらましかの
おとゝにいかてかく心きよきさまをしらせたてまつらむとおほすにそけに宮つ
かへのすちにてけさやかなるましくまきれたるおほえをかしこくも思より給け
るかなとむくつけくおほさるかくて御ふくなどぬき給て月たゝは猶まいり給は
むこといみあるへし十月はかりにとおほしの給をうちにも心もとなくきこしめ
しきこえ給人ゝはたれもゝゝいとくちおしくてこの御まいりのさきにと心よせ
のよすかゝにせめわひ給へとよしのゝたきをせかむよりもかたきことなれは
いとわりなしとをのゝゝいらふ中將もなかゝゝなることをうちいてゝいかにお
ほすらむとくるしきまゝにかけりありきていとねんころにおほかたの御うしろ
みをおもひあつかひたるさまにてついせうしありき給たはやすくかるらかにう
ちいてゝはきこえかゝりたまはすめやすくもてしつめ給へりまことの御はらか
らの君たちはえよりこす宮つかへのほどの御うしろみをとをのゝゝ心もとなく
そ思ける頭の中將心をつくしわひしことはかきたえにたるをうちつけなりける
御心かなと人々はおかしかるにとのゝ御つかひにておはしたりなをもていてす
忍ひやかに御せうそこなともきこえかはし給ければ月のあかき夜かつらのかけ
にかくれてものし給へりみきゝいるへくもあらさりしをなこりなくみなみのみ
すのまへにすへたてまつる身つからきこえ給はんことはしも猶つゝましければ
宰相のきみしていらへきこえ給なにかしらをえらひてたてまつり給へるは人つ
てならぬ御せうそこにこそ侍らめかくものとをくてはいかゝきこえさすへから

む身つからこそかすにも侍らねとたえぬたとひも侍なるはいかにそやこたいの
事なれとたのもしくそ思給へけるとてもものしとおもひたまへりけにとしころの
つもりもとりそへてきこえまほしけれとひころあやしくなやましく侍れはおき
あかりなともえし侍らてなむかくまでとかめ給も中／＼うと／＼しき心ちなむ
し侍けるといとまめたちてきこえいたし給へりなやましくおほさるらむみき丁
のもとをはゆるさせ給ましくやよし／＼けにきこえさするも心ちなかりけりと
ておとゝの御せうそことも忍ひやかにきこえ給ようゐなと人にはおとり給はす
いとめやすしまいり給はむほどのあないくはしきさまもえきかぬをうち／＼に
の給はむなんよからむなに事も人めにはゝかりてえまいりこすきこえぬことを
なむ中／＼いふせくおほしたるなとかたりきこえ給ついていてやおこかまし
き事もえそきこえさせぬやいつ方につけてもあはれをは御覽しすくすへくやは
ありけるといよ／＼うらめしさもそひ侍かなまつはこよひなどの御もてなしよ
きたおもてたつかたにめしいれてきむたちこそめさましくもおほしめさめしも
つかへなとやうの人ゝとたにうちかたらはゝやまたかゝるやうはあらしかしさ
ま／＼にめつらしきよなりかしとうちかたふきつゝうらみつゝけたるもおかし
ければかくなむときこゆけに人きゝをうちつけなるやうにやとはゝかり侍ほと
に年ころのむもれいたさをもあきらめ侍らぬはいと中／＼なることおほくなむ
とたゝすくよかにきこえなし給にまはゆくてよろつおしこめたり

いもせ山ふかきみちをはたつねすてをたえのはしにふみまよひけるよとう

らむるも人やりならず

まとひけるみちをはしらすいもせ山たと／＼しくそたれもふみゝしいつか

たのゆへとなむえおほしわかさめりしなにこともわりなきまでおほかたのよを
はゝからせ給めれはえきこえさせ給はぬになむをのつからかくのみも侍らしと
きこゆるもさることなればよしなかゐし侍らむもすさましきほとなりやう／＼
らうつもりてこそはかことをもとてたち給月くまなくさしあかりてそらのけし
きもえむなるにいとあてやかにきよけなるかたちして御なをしのすかたこのま
しくはなやかにていとおかし宰相の中将のけはひ有さまにはえならひ給はねと
これもおかしかめるはいかてかゝる御なからひなりけむとわかき人ゝは例のさ
るましきことをもとりたてゝめてあへり大將はこの中將はおなし右のすけなれ
はつねによひとりつゝねんころにかたらひおとゝにも申させ給けり人からまい
とよくおほやけの御うしろみとなるへかめるしたかたなるをなとかいあらむと
おほしなからかのおとゝのかくし給へることをいかゝはきこえかへすへからん

さるやうあることにこそと心え給へるすちさへあれはまかせきこえ給へりこの
大將は春宮の女御の御はらからにそおはしけるおと、たちを、きたてまつりて
さしつきの御おほえいとやむことなき君也とし卅二三のほとにものし給きたの
かたはむらさきのうへの御あねそかし式部卿の宮の御おいきみよとしのほと
みつよつかこのかみはことなるかたはにもあらぬを人からやいか、おはしけむ
おうなとつけて心にもいれすいかてそむきなんとおもへりそのすちにより六条
のおと、は大將の御ことはにけなくいとおしからむとおほしたるなめりいろめ
かしくうちみたれたる所なきさまなからいみしくそ心をつくしありき給けるか
のおと、ももてはなれてもおほしたらさなり女は宮つかへをものうけにおほい
たなりとうち／＼のけしきもさるくはしきたよりあれはもりき、てた、おほと
の、御おもむけのことなるにこそはあなれまことのおやの御心たにたかはすは
とこの弁の御もとにもせためたまふ九月にもなりぬはつしもむすほ、れえむな
るあしたにれいのとり／＼なる御うしろみどものひきそはみつ、もてまいる御
ふみともをみ給こともなくてよみきこゆるはかりをき、給大將との、にはなを
たのみこしもすきゆくそらのけしきこそ心つくしに
かすならはいとひもせまし長月に命をかくるほどそはかなきつきた、はと
あるさためをいよくき、給なめり兵部卿の宮はいふかひなきよはきこえむか
たなきを

あさ日さすひかりをみてもたまさ、のはわけの霜をけたすもあらなむおほ
したにしらはなくさむかたもありぬへくなんとていとかしけたるしたおれのし
も、おとさすもてまいる御つかひさへそうちあひたるや式部卿の宮の左兵衛
督はとの、うへの御はらからそかししたしくまいりなとし給君なれはをのつか
らいとよくもの、あないもき、ていみしくそ思ひわひけるいとおほくうらみつ
、けて

わすれなむと思ふも物のかなしきをいかさまにしていかさまにせむかみの
いろすみつきしめたるにほひもさま／＼なるを人々もみなおほしたへぬへかめ
るこそさう／＼しけれなといふ宮の御かへりをそいか、おほすらむた、いさ、
かにて

心もてひかりにむかふあふひたにあさをく霜を、のれやはけつとほのかな
るをいとめつらしとみ給に身つからはあはれをしりぬへき御けしきにかけ給つ
れはつゆはかりなれといとうれしかりけりかやうになにとなれとさま／＼な
る人々の御わひこともおほかり女の御心はへはこのきみをなんもとにすへきと
おと、たちさためきこえ給けりとや